

# 山脇百合子先生を悼む

鈴木 美津子

実際に山脇百合子先生ご本人にお目にかかるずいぶん前に、先生のお書きなつたご本を熟読玩味し、私淑していた。山脇先生は1970年代後半に立て続けに3冊ご著書を刊行なさった。『エリザベス・ギヤスケル研究』（北星堂書店、1976）、『英国女流作家論』（北星堂書店、1978）、そして『ブロンテ姉妹』（新潮社、1978）である。『エリザベス・ギヤスケル研究』は、本邦初のギヤスケルに関する実に画期的な研究書である。この当時、ギヤスケルの長編小説の翻訳で容易に手に入るものは、筑摩書房の『世界文学全集14：オースティン・ギヤスケル』（1967）に収録されていた小池滋先生がお訳しになった『女だけの町』（1967）のみであった。ブロンテ姉妹やジェイン・オースティンに比較すると、ギヤスケルの小説が一般にはあまり馴染みがなかった時代に、ギヤスケルの主要作品を取り上げ、縦横無尽に論じられた先生のご著書は実に先駆的であった。これ以降、ギヤスケルを論じる際の基本的な文献となったのは言うまでもない。先生のお母様で画家の横山美智子氏に捧げられた『英国女流作家論』は、「あとがき」によると『実践女子大学紀要』、『実践文学』に長年にわたって発表されたご論考をお纏めになったものだとのこと。フェミニズムがそれほど浸透していなかった時代に、アラ・ベーン、オースティン、ブロンテ姉妹、アイヴィ・コンプトン＝バーネットなどの女性作家を仔細に分析した本書は、この上なく清新で、示唆的で、刺激的であった。

『エリザベス・ギヤスケル研究』も『英国女流作家論』もどちらも表紙は薄紫というか藤色一色で背表紙に金文字で表題が印刷されていて、とても品の良い装丁であった。講座イギリス文学作品論の第4巻として刊行された『ブロンテ姉妹』の表紙は、シリーズ共通の緑色と白で統一されていて、残念ながら先生のお人柄や個性をうかがい知る手掛かりになるものは皆無であった。『源氏物語』を想起させる薄紫色と金色の装丁を眺めながら、山脇先生はさぞかし気品に満ちたあでやかな方なのだろうと想像を逞しくした。

山脇先生に初めてお会いしたのは、1989年10月15日、実践女子大学日野キャンパスで開催された日本ギヤスケル協会の第1回大会においてである。ついに山脇先生にお目にかかる機会がやってきたと、勇んで大会に出席した。大会会場で、遠くから拝見しただけなのであるが、年齢を超越した若々しい雰囲気、その場がぱっと明るくなるようなお姿が印象的だった。このとき、先生は71歳でいらしたのだと思うと、しなやかで強靱な知性、力みなぎる行動力に圧倒される。

いつの大会の時だったか、当時副会長を務めておられた中岡洋先生がご挨拶をなさった折りに、少年のようにはにかみながら、早稲田の学生時代に先輩であった山脇先生を「優しくとお美しいお姉様」として慕っておられたというお話をなさった。山脇先生が中岡先生の学生時代のマドンナだったという微笑ましい告白に、私はさもありなんと深く頷いた。

山脇先生を最後にお見かけしたのは、ご息子が介助される車椅子に乗って大会会場にお見えになった時である。ご息のお母様に対するお優しいお心遣いを拝見して、先生はご研究、教育、大学業務とご多忙の中、とてもお幸せなご家庭を築いてこられたのだなと思ひ至り、まさしく日本のギヤスケル夫人でいらっしゃる、と思ったことを記憶している。

60代にご著書を3冊上梓なさり、70代で学会を創設され、80代半ばまで会長をお務めになり、100歳で逝かれた山脇先生のまことに見事な充実した生涯に感嘆の念を禁じ得ない。

山脇百合子先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(日本ギヤスケル協会第4代会長、東北大学名誉教授)